

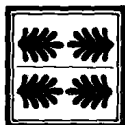
郭沫若

李白と杜甫
(下)

須田禎一 訳



須田禎一<訳者>1909年茨城県生まれ。東大文学部卒。朝日新聞・北海道新聞を経た後、フリーで活躍。1973年没。著書「独絃のペン・交響のペン」「人間主義をつらぬいて」等。訳書「郭沫若詩集」「郭沫若史劇全集」(全4巻)他。



講談社文庫

李白と杜甫(下)

郭沫若 須田禎一訳

昭和51年7月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製版 株式会社まゆら美研

印刷 東洋印刷株式会社

製本 有限会社千曲堂

© Hisa Suda 1976

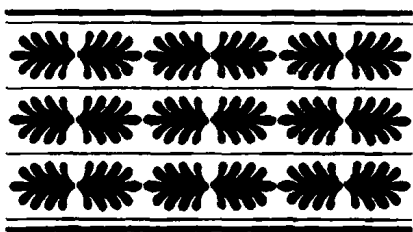
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

李白と杜甫(下)

郭沫若 須田禎一訳



講談社

八 杜甫と岑参

九 杜甫と蘇渙

李白・杜甫関係地図

李白・杜甫年表

訳者あとがき

二六

二六

二九三

二九四

三二

李白と杜甫

(下)

目次

第二編 杜甫について

一	杜甫の階級意識	八
二	杜甫の門閥觀念	四六
三	杜甫の功名欲望	七一
四	杜甫の地主生活	九六
五	杜甫の宗教信仰	一三〇
六	杜甫は生涯酒を好んだ	一六八
七	杜甫と嚴武	一九七

第二編 杜甫について

一 杜甫の階級意識

封建社会の階級矛盾を、杜甫は、安史の乱前後の流離放浪中に、身をもって体験した。朱門酒肉臭、路有凍死骨（「京より奉先県に赴きて詠懷」）は、人々が道理にかなった名句として褒めたたえるものである。明らかに「庖には肥肉あり厩には肥馬あれど、民には飢色あり、野には餓殍あり」（孟子・梁惠王篇）からの換骨奪胎ではあるが、一千二百余年前にこれだけの明確な認識をしていたことは、貴重なことだと言つてよい。ただ問題はここからさらに一步を進めたところにある。この矛盾を認識したならば、この矛盾をどう解決するか、換言すれば、君はいつたいどの階級の立場に立つのか、誰のために服務するかという問題である。ここまでつきつめると、杜甫の階級的立場は露出せざるをえない。杜甫は地主階級、支配階級の立場に立ち、地主階級、支配階級のために服務したのである。

杜甫は、広徳元年（七六三年）夏、梓州（いま四川省三台県）にあつて「喜雨」と題する詩を作つた。そのなかにつぎの句がある。

「安得鞭雷公、滂沱洗呉越」——どうすれば、鋼鉄の鞭で雷公を鞭打ち、大雨を降らせて呉越の地一帯を洗いきよめることができよう。これは一体どんな意味か。まずこの詩の下にしるされた

自らの脚注を見たまゝ。いわく「時に浙江東部に盜賊多しと聞く」。つまり杜甫は吳越一帯の「盜賊」を洗いきよめようとしたのだ。「盜賊」とは何か。わたくしはいま、当時の情況をのべた『資治通鑑』の一節を引用したい。

肅宗の宝應元年（七六二年）八月、台州（浙江の臨海）の賊、袁晁にひきいられて浙東の諸州を陥れ、年号を宝勝と改む。民の賦斂に疲れたる者多くこれに帰す。李光弼は兵を派遣して、袁晁を衢州（いま浙江の衢県）に撃ち、これを破る。九月、袁晁は信州（いま江西の上饒）を陥る。冬十月、袁晁はさらに温州（いま浙江の永嘉）および明州（いま浙江の寧波）を陥る。代宗の広徳元年（七六三年）夏四月庚辰（七日）、李光弼は袁晁を擒え浙東を平げたるむねを奏す。時に袁晁は二十万の衆を集めて州県城を攻めていたりしも、李光弼は部將の張伯儀をして兵をひきいしめ、これを平らげたるなり。

杜甫のいう「浙東の盜賊」とは、袁晁の指導する起義農民を指す。二〇万に近い農民起義軍を、杜甫は、きれいさっぱりと「洗いきよめ」えないことを残念がっていたが、杜甫の希望は達せられたのである。杜甫が尊敬する「唐朝中興の名將」の一たる李光弼——「八哀詩」のなかで哀悼している二番目の人——を杜甫は「雷公」として期待したのであるが、この「雷公」は、杜甫の鋼鞭も待たずに、八カ月の「剿滅作戦」で農民起義軍を「掃蕩」した。もって杜甫の階級的立場を示すに足るものがある。

も一つ例をあげよう。「夔府にて懷書」詩のなかにつぎの句がある。

「緑林寧小患、雲夢欲難追、即事須營胆、蒼生可察眉」——この詩句は晦渋で、注を見なければ

理解しがたい。「雲夢」の故事は『左伝』魯定公四年の項から出ている。いわく「楚子涉睢（睢とは楚ノ昭王の名）、江をわたりて雲中（雲夢の中）に入る。王の寝ねたるとき、盜賊これを攻め、戈をもつて王を撃つ。王孫由于（由于とは王孫の名）背をもつてこれをふせぐ、肩にあたる。杜甫の詩の意味は、強盜とはひどいものだ、「緑林の小盜」といえども「小患」などと輕視してはならないぞ、輕視したら楚ノ昭王みたいなめに遭うぞ、悔やんでも追いつかないぞ、である。「察眉」の故事は『列子・說符編』にある。いわく「晉国、盜に苦しむ。却雍なる者あり、能く盜を見分ける眼を持ち、眉と睫のあたりを見つむれば、盜なるか否かを知る。晉侯その者を登用して盜を見分けしむるに、一としてあやまることなし。晉侯大いに喜ぶ。杜甫はこの典故を用いて、蒼生（人民）に臥薪嘗胆の警戒をさせ、禍害を未然に防ぐために「眉と睫のあたりを見つめて」乱黨を発見させよう、というのだ。もつて杜甫の階級感情が、どんなにおごそかできびしいかを物語るに足る。

以上の二つの例で、杜甫の階級意識と立場はわかる。杜甫は完全に支配階級、地主階級の立場に立っていた。この階級意識と立場は、杜甫の思想のバックボーンをなし、今日に残る彼の詩と文の大部分を貫いている。封建支配の隆盛期たる唐代に生まれ、このような意識をもち、このような立場をとったのは怪しむにたりない。むかしの封建時代の士大夫たちが杜甫のこのような意識と立場を称揚したのも怪しむにたりない。怪しむべきは、解放前後の現代の研究者たちが、旧来の立場を受け継いで、杜甫を批判する態度ではなく全面的に称揚した上に新式の褒め言葉を加えていることである。むかしの専門家は杜甫を「詩聖」と称したが、現代の専門家たちは彼を「人民詩人」と称している。「詩聖」というのなら人民には関係ない。「人民詩人」というので

は、人民としても問題にせざるをえない。

現代の専門家たちは杜甫の「三吏」と「三別」を最も「人民性」に富む作品と称揚する。そこでわれわれは、この六首の作品を一步つとんで研究してみよう。慎重を期するために、これらの作品を字句を追って現代語に訳してみる。そうすれば的確に理解を深めることができる。

この六首の時代背景は、どうであつたか。肅宗の乾元元年（七五八年）秋、杜甫は左拾遺の職にあつたが、さきの宰相房琯が罪せられたのを救おうとしたことから、華州（いま陝西省華陽縣）の司功に降職されてしまった。冬になつてから洛陽にもどつてきた。ちやうどそのとき、郭子儀、李光弼、李嗣業（りきぎょう）が六〇万の大軍をもつて安慶緒（あんけいしちやう）を相州（いま河南省安陽）に包囲した。安慶緒は堅く守つて史思明（ししやうめい）の救援を待った。史思明は魏州（故城はいまの河北省大名縣の東にあつた）から兵を率いて相州へかけつけた。翌くる乾元二年三月、兩軍が安陽河の北岸で交戦していると、とつぜん大暴風がおこり、砂を巻き樹を根こそぎし、天地は真つ暗になり、咫尺（しせき）も弁じ得ぬようになつた。兩軍は甲冑（こうけう）や輜重（ししやうじゆう）を投げ棄ててそれぞれ南北に潰走した。郭子儀は黄河に架けられた橋を切り落として、東都洛陽を保衛するを得た。李光弼と王思礼らの軍は洛陽へもどれたが、その他の軍は散り散りになつて元の駐屯地へたどりついたのみ。杜甫はこのような情況のもとに洛陽にもどり、また洛陽から離れた。おそらく相州潰滅後まもなく、杜甫は洛陽から華陽へもどつた。その途上の見聞から、「新安吏」「石壕吏」「潼關吏」の「三吏」と「新婚別」「垂老別」「無家別」の「三別」の作品が生まれた。それぞれ独立した六首の詩をなしているが、一つのテーマを六つの段に分けた一樂章とみることができる。当時の戦場となつた地帯に住む人民の生活のさまをとどめた作品として、たしかに貴重なものである。まず「三別」を、つづいて「三

吏を現代語に訳してみる。

新婚別

兔糸付蓬麻
引蔓故不長
嫁女与征夫
不如棄路傍
結髮為君妻
席不暖君床
暮婚晨告別
無乃太匆忙
君行雖不遠
守辺赴河陽
妾身未分明
何以拜姑嫜
父母養我時
日夜令我藏
生女有所歸
鷄狗亦得將

君今往死地
沈痛迫中腸
誓欲隨君去
形勢反蒼黃
勿為新婚念
努力事戎行
婦人在軍中
兵氣恐不揚
自嗟貧家女
致此羅襦裳
羅襦不復施
對君洗紅粧
仰視百鳥飛
大小必雙翔
人事多錯遷
與君永相望。

蓬ともぎや麻あしにからむ　ねなしかずらは
蔓つたを長くのばすことは　かなわぬもの

むすめを征夫に とつがせるは

路傍に棄てるよりも むなしいもの

髪を結んで あなたと夫婦となり

あなたの席を 暖めるとまもなく

ゆうべ嫁にきて 今朝はもうお別れ

なんという あわただしさでしょう

あなたの征くさは 近くの河陽だけれど

そこはすでに 戦の場

わたしの身分は まださだかでないゆえ

嫁としてお姑嬢に お仕えできるかどうか

さとの父母は わたしを育てるのに

ひるよる箱入りむすめ 扱いでした

女はどっちみち 夫にしたがうもの

女の運命は 夫しだい

あなたは今 死地へいらつしやる

わたしの腸は ちぎれるほどつらい

ご一緒にまいりたい と思うけれど

それはかえって ごめいわく
新妻のことなど お心にかかれず

せいぜい軍務に お精を出しなさい
 女が陣中に あつたりしたら

風紀をそこない 士気にひびくとか

わたしはもとより 貧家のむすめ

新しく仕立てた この衣裳も

二度とまとおうとは 思いませぬ

あなたの前で 紅粧べにしょういも洗いおとします

あれ 群れ飛ぶ 鳥たちは

みんな番で 飛んでいます

人間のみは ままならぬもの

隔てられて永く待つばかりの身。

すべて新婚の女の別れを悲しむ内容であり、新婚の女が深く嘆きながらも事の大筋を知り、健けな気でもあることをよく描写しえている。しかし、これは詩人によって理想化された姿であることに相違ない。詩人は自らの地主生活の習慣にしたがつて「貧家の女」を描いている。ほんとの「貧家の女」は生産労働を離れることはできないから「さとの父母はわたしを育てるのに、ひるよる箱入りむすめ扱い」なんてどうしてできよう。これは明らかに詩人の階級意識を物語るものである。このような、ゆうべ結婚して朝には別れたり、夫おとこを送って軍隊まで行ったりする「貧家の女」がいたということはデタラメではあるまい。ただ杜甫の描写には迫真さが不足している。